

現代英語における空白語音

西原, 忠毅
九州大学教養部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6796125>

出版情報 : 言語科学. 3, pp. 54-59, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



現代英語における空白語音

西 原 忠 毅

同一の語音に共時的に全く関連のないものとされる複数の意味が共棲する現象は、多かれ少かれどの言語にもある。そういう語を同音異義語 (homonym) という。語音は同一であっても綴り字において書き分けられるという語は、とくに同音異綴語 (homophone) と呼んでいる。いずれにしても聴覚の面では同じことで、聴者側に混乱を生じやすく、よけいな心労が要る。

もっとも同音語の存在は、賛成する側は記憶の節約であるとか、掛け言葉の遊戯が可能であると主張する。果して記憶の節約になるかどうかはよく吟味してみなくては言えないことであるが、掛け言葉の方はその通りであろう。問題は掛け言葉があまりに多すぎることなのである。同音語が多いのは意味の明徴を期する上からいうと防害となる。損得相殺してみてもやはり損の方が大きかろう。そこでここに提案するのは同音語全廃論ではない。そういうものをなるべく減らして、意味の区別を語音の区別に対応せしめるようにこれからの造語者は心掛けたがよいというのである。

今日では単音節語からなる中国語は言うに及ばず、仏語や日本語においても同音語過多の状況にある。英語や独語でさえもそう言えるかと思う。かといって現存する語の音を人為的に変更するのは不可能に近いことなので、せめて新語を創作するときに語音の差別性を最重要事として考慮に入れてもらえないであろうか。そういわなくても新語創造においては差別性の契機は自ら働いている、唯他の要因がそれを圧倒するまでであると自然順応をきめこめば、こういう注文はしても無効となるが、新製品や新地名や新概念ぐらいは、他の要因を抑制して語音の差別性第一に命名できないものであろうか。アメリカの新天地が世界各国の地名の陳列棚みたいになったのは事の成行き止むを得ぬとしても「北九州市」などは感心しない。過去においても Utopia や camera や chaos のような良い見本があるではないか。九州大学工学部で研究されている翻訳機械が日本語の「彼女」というおかしげな訳語を 'sare' にしているなど、ware, nare, kare の脈絡からしても、また西欧語の三人称女性単数名詞のもつ語頭子音の連想からしてもけだし名案というべきであろう。意味の乗っかっていない、個性をもった音の組合せはまだそこらにいくつも落ちている。

そこで次に現代英語 (英国標準語) について、そういう落穂を拾ってみようと思う。いち

おう現代英語の音素であればどのような組合せでもよいと仮定すれば、母音を21個、子音を24個とした場合（V=母音，C=子音），単音節語のもっとも簡単な形から並べて次のような組合せが計算される。

V 21

CV, VC各 504

CCV, VCC, CVC各 24, 192

CCVC, CVCC, CCCV, VCCC各 555, 864

CCVCC, CVCCC, CCCVC各 1,334, 0636

以下省略するが、V単独の場合も加えて音素3個までの組合せよりなる単音節語だけですでに73,605に達する。音素4個の組合せまで入れると実に2,297,061になる。OEDの収録語数約45万、Websterのそれが約60万、また日常使用される英語の語数が約10万というようなことから推して、これだけですでに有りあまる。ところが単純に計算されたこれらの全てが英語音として成立可能ではなく、次のような制約が考えられる。

(1)現代英語の語音体系の性格に合致したものであること。もしそうでないと英語音の個性を損じることになる。例えば、pay, pie, Pow, Poe などがあるのだから poi を加えたからといって語音体系の性格を破ることにはなるまい。しかし pe や po を混えたら異物感を免かれまい。但しここで問題となるのは、特定の種類の組合せの量的変化が語音体系の本質的性格を変革することになるかどうかである。例えば、CV型で /θ/ V は θɔː (thaw) と θaɪ (thigh) の他に見当たらないが、ɔː と ai 以外の長母音・二重母音と組合せて10数箇を造ることができる。そうした場合少くとも相対的な性格の変化は起きそうである。それを全面的に許して差支えないか、あるいはどの辺に止めるべきかの問題が残る。

また語音体系は共時的に成立するものであるから、過去の廃語はすでに存在しないものとして取扱うべきであって、それらの語音を復活することは復活でなく、全く新しい問題として語音体系への干渉を考えるべきである。

(2)語音の長短が適度であること。子音1個というのは会話体における弱音としては英語に現われるけれども、音節を形成しないので普通の語音とはならない。母音1個は感嘆詞に適しているとか、CV と VC は particle の占める率が大きいという事実を造語に当て考慮しないわけには行かない。単音節語は Anglo-Saxon 系の語の特徴であり、多音節語は外来語とくにラテン系の外来語の特質とされる事実も無視できない。あまりに音節が多いのは、内容が複雑であるとか、強調語とか、メロディーを暗示する語でなければ、時間とエネルギーの浪費となる。現実には5～6音節の語はざらにあるけれども、それ以下の組合せでもっ

て十分間に合う数が得らるれば、語形は短いほど好ましい。

(3)以上の二点から認容されても発音がしにくかったり、聴いて他の語音と紛らわしいものは推奨に値しない。例えば、 ɔ: と ou は従来分離が悪かった。しかし近年の英国語南部音のように ou が əu と発音されるようになるとその心配はなくなってくる。逆に aiə と auə はこの頃のようにぞんざいに発音されると紛らわしくなる。また θ , δ は英語音の特徴であるが、閲歴を見ればそれぞれに s , z に混同されやすいことが分る。

以上(1)~(3)のような制約を加えれば、空白語音の数は前の計算よりかなり下回るものと思う。しかしどの程度そうした制約を加えてよいかは甚だ問題で、以下簡単を組合せから二三を取上げて考察の対象として見たいと思う。

V 型 (空白 5)

弱音を度外視すれば、長母音・二重母音だけが可能である。 $21 - 7 = 14$

i:	a:	ɔ:	u:	ə:	ei	ai	ɔi	au	ou	iə	ɛə	ɒə	uə
e	ah	oar or	○	er	a aye	i, I aye, eye	○	○	oh	ear	air heir	oar or	○

oar, or を ɒə と発音する人は ɔ: の音を持たず、その逆でもあるから、空白語音は5になる。

CV 型 (空白 107)

(1) ʒ と ʝ は語頭に来ることはないからCは $24 - 2 = 22$ である。(2)fortisの短母音 i , e , æ , ɔ , u , Δ は語尾に来ず、lenisの ə は弱形として以外に単音節語に用いられ得ない——すなわち長母音か二重母音しか語尾には来ないからVは $21 - 7 = 14$ となる。従ってCVの可能な組合せは $22 \times 14 = 308$ となる。

1) /p/V (blank 1)

i:	a:	ɔ:	u:	ə:	ei	ai	ɔi	au	ou	iə	ɛə	ɒə	uə
p	pa	pore pour	pooh purr	per	pay	pie	○	Pow	po	peer pier	pair pare	pore pour	poor

2) /b/V (blank 0)

b, be bee	bar	bore boar	boo	burr	bay Bey	by buy	boy buoy	bow bough	bow	beer	bare bear	bore boar	boor
--------------	-----	--------------	-----	------	------------	-----------	-------------	--------------	-----	------	--------------	--------------	------

3) /t/V (blank 1)

i: ʌ: ɔ: u: ə: ei ai oi au ou iə ɛə ɒə uə

t	tar	tore	to, too	ter	Tay	tie	toy	○	tow	tear	tear	tore	tour
tea	ta	tor	two								tare		

4) /d/V (blank 4)

d	○	door	do	○	day	die	○	Dow	doe	deer	dare	door	○
Dee		Dore			dye			dhow		dear		Dore	

5) /k/V (blank 3)

key	car	core	coo	cur	k	○	coy	cow	Co.	○	care	core	○
				curr									

6) /g/V (blank 7)

ghee	○	gare	○	○	gay	guy	○	○	go	gear	○	gore	○
------	---	------	---	---	-----	-----	---	---	----	------	---	------	---

7) /tʃ/V (blank 8)

○	char	chore	○	○	○	○	○	chow	○	cheer	chair	chore	○
---	------	-------	---	---	---	---	---	------	---	-------	-------	-------	---

8) /dʒ/V (blank 7)

g	jar	○	Jew	○	j	○	joy	○	Joe	jeer	○	○	○
gee													

9) /f/V (blank 4)

fee	far	for	○	fur	fay	fie	○	○	foe	fear	fair	for	○
		four		fir							fare	four	

10) /v/V (blank 10)

v	○	○	○	○	○	○	vie	○	vow	○	veer	○	○	○
---	---	---	---	---	---	---	-----	---	-----	---	------	---	---	---

11) /θ/V (blank 12)

○	○	thaw	○	○	○	thigh	○	○	○	○	○	○	○	○
---	---	------	---	---	---	-------	---	---	---	---	---	---	---	---

12) /ð/V (blank 8)

thee	○	○	○	○	○	they	thy	○	thou	though	○	○	○	○
the														

i: ʌ: ɔ: ʊ: ɜ: ei ai ɔi au ou iə ɛə ɒə uə

13) /s/V (blank 3)

see	○	saw	Sue	sir	say	sigh	soy	sow	so	sear	○	sore	○
sea		sore							sow			soar	
		soar											

14) /z/V (blank 13)

○	○	○	zoo	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
---	---	---	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

15) /ʃ/V (blank 3)

she	shah	shore	shoo	○	shay	shy	○	○	show	sheer	share	shore	sure
					Shea					shear			

16) /h/V (blank 1)

he	ha	hoar	who	her	hay	hi	hoy	how	hoe	here	hair	hoar	○
		whore			hey	high				hear		whore	

17) /m/V (blank 2)

me	mar	more	moo	○	may	my	○	mow	mow	mere	mare	more	moor
----	-----	------	-----	---	-----	----	---	-----	-----	------	------	------	------

18) /n/V (blank 5)

knee	○	nor	○	○	nay	nigh	○	now	no	near	nare	nor	○
					neigh								

19) /l/V (blank 6)

lee	lar	lore	○	○	lay	lie	○	○	low	leer	○	lore	○
lea													

20) /r/V (blank 3)

re	○	roar	rue	○	ray	rye	Roy	row	row	rear	rare	roar	○
----	---	------	-----	---	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	---

21) /w/V (blank 2)

we	○	war	woo	were	way	y	○	wow	wo	wear	wear	war	woor
		wore		whir		why			woe			wore	
				whirr									

22) /j/V (blank 4)

ye	yah	your	you	○	yea	○	○	○	yeo	year	Yare	your	your
			yew										

この型の空白語音は筆者の数えるところでは計 107，可能な組合せの約 3 分の 1 が残っていることになる。破裂音，摩擦音のあるもの，半母音は良く使用されている。使い残しの多いのは z 13， θ 12， v 10， δ 8， $tʃ$ 8， $dʒ$ 7 であるから，これが満さるれば **sibilant** が多くなる。**sibilant** は現在でも少いとは言えないのに，もし頻出度数の多い語に使用されて語頭の **sibilant** が大量に増加するとなれば，英語は嘯々たる風の音か，落葉の中を蛇が這い回るような感じのものになりかねない。またこれらの語音がすべて使われると前述の通り紛らわしい語音が生じる怖れもなしとしない。

母音の例から見れば，この型では ∂ の残りが多い。14 に達する。思うにこういう短小形では音質の曖昧さが嫌われるのであろう。また 14 の残存がある ua の場合は，他の centering diphthong と同様，第 2 要素は語尾の r の転音という来歴が現状をある程度物語っている。意味に応じて使って差支えない語音であろう。

(以下次号)